

# 2000年度「社会・意識調査データベース (SORD)」 プロジェクト活動報告

佐藤 和洋・新國三千代・石井 和平・高橋 徹・中澤 秀雄

## 1. はじめに

本稿では、まず、2000年3月末に開催された第8回「社会・意識調査データベース (SORD)」ワークショップ報告について述べ、次に2000年度の「社会・意識調査データベース (SORD)」プロジェクトの活動概要について報告する。

## 2. 第8回「社会・意識調査データベース (SORD)」ワークショップ開催報告

### 2.1 概要

2000年3月22日にSORD(社会・意識調査データベース)作成プロジェクト主催の下、第8回目の「社会・意識調査データベース」ワークショップを札幌学院大学において開催した。「社会・意識調査データベース (SORD)」作成プロジェクトの活動は多くの社会科学研究者に認知されつつある。その顕著な現れは、SORDホームページへのアクセス数の急激な増加である。このような状況を踏まえ、SORDの有用性を一層確実なものとするために、今回のワークショップでは、SORDのこれまでの活動内容を分析し、今後のあり方について議論することとした。

以下、本ワークショップで行われた報告及び討論の概要について報告する。

### 2.2 SORDワークショップのプログラム

第8回SORDワークショップは2000年3月22日(水)13時30分から17時00分にかけて、札幌学院大学C館4階会議室で開催した。以下は、そのプログラムである：

(A)挨拶 佐藤和洋(札幌学院大学社会情報学部)

(B)SORDの現状と今後のあり方(13時30分～15時50分)

司会 石井和平(札幌学院大学社会情報学部)

(a)SORDの現状と課題(13時30分～14時30分)

佐藤和洋(札幌学院大学社会情報学部)

(b)SORDの今後(14時30分～15時50分)

①SORD維持と新システム環境構築に向けて

是永 論(立教大学社会学部)

---

|                 |              |
|-----------------|--------------|
| SATO Kazuhiro   | 札幌学院大学社会情報学部 |
| NIKKUNI Michiyo | 札幌学院大学社会情報学部 |
| ISHII Wahei     | 札幌学院大学社会情報学部 |
| TAKAHASHI Toru  | 札幌学院大学社会情報学部 |
| NAKAZAWA Hideo  | 札幌学院大学社会情報学部 |

## ② SORD の将来展望

盛山和夫 (東京大学文学部)  
小島秀夫 (茨城大学教育学部)

休憩 (15 時 50 分～16 時 00 分)

## (C)総括討論 (16 時 00 分～17 時 00 分)

司会 佐藤和洋 (札幌学院大学社会情報学部)  
コメンテータ 盛山和夫 (東京大学文学部)  
小島秀夫 (茨城大学教育学部)  
是永 論 (立教大学社会学部)  
高橋 徹 (札幌学院大学社会情報学部)  
中澤秀雄 (明治学院大学 (4 月より本学))  
石井和平 (札幌学院大学社会情報学部)

## 2.3 報告と討論の概要

以下に上記プログラムに従って行われた報告と討論の概要について示す。

## (1)報告の概要

2000 年度 SORD 事務局代表 (佐藤) から, SORD の現状と課題と題して, 下記内容について報告があった。ここでは, 紙面の関係から, その報告事項のみ示すこととする。

## (A) SORD の現状と課題 (佐藤和洋)

まず, SORD の現状として, 下記の観点から報告した:

- (a) SORD の環境 (人的資源, ハードウェア資源, ソフトウェア資源, 予算状況)
- (b) DB の作成状況
- (c) HP のアクセス状況

2000 年 3 月 20 日現在のアクセス数は 6,000 件及びアドレス登録者数は約 260 名である。登録者の所属組織は大学, 高等学校, 中学校, 会社, 公的機関, 国外大学, 等多岐にわたっているが, 大学が約 8 割を占め, その内訳は学生と教員が半々程度である。

## (d) 1999 年度の活動状況

新規データ登録, SORD の教育利用, HP メンテナンス, 素データ利用・情報問合せ対応, 科研費申請等について報告した。

次に, SORD の課題について, 下記の観点からその対応 (案) も含めて報告した:

## (a) データ提供申し出への対応方法

\* 受理基準や手順・配布文書の明確化とデータ作成支援方法 (謝金等), 他

## (b) SORD の教育利用

\* 手続き方法, 資料提供方法, 運用管理方法 (利用規定等), 利用可能データの明確化, 他

## (c) SORD HP 掲載情報の質向上

\* 既管理データの分析情報の充実, HP 提示内容及び体裁の充実, 他

## (d) SORD DB データの充実化

\* データ収集方法, 管理運営方法, 活用方法, 情報発信内容の拡充, 規模の拡大, 他

## (e) SORD 活動予算

\* 学内予算, 学外予算獲得状況と予算減少傾向への対応, SORD サーバ環境の確保, 他

## (f)人的資源の確保

\*新たな活動支援者(学内外)の確保, 研究者間ネットワークの活用, 他

## (g) ICPSR への加盟依頼について

\*佐藤氏(東大社科研)からの参加依頼への対応

## (h) SORD のあり方

\* SORD に何を求めるのか, 何が求められているのか, という視点から SORD のあるべき姿について問題提起

## (2) 討論の概要

(1)の報告及び SORD の今後のあり方に関する提言を基に総括討論として議論された概要を, 以下に報告する。

## (A) SORD 維持と新システム環境構築に向けて(是永 論)

是永氏による「利用者状況から模索する SORD の維持とシステム拡張」と題した問題提起をもとに, 議論を行った。具体的には, 誰が使用するのか?(キャリア, 目的, 専攻分野, 調査過程, 教育利用), どのように使用するのか?(利用頻度と使いやすさを考慮した検索項目, 利用頻度を考慮したデータ内容, 公開データのあり方), 使用後の結果のフィードバック方法は?(2次的情報(研究成果, 教育的効果, 活用例等)の充実・蓄積・利用), という観点から問題提起があり, それをもとに新たな SORD システムのあり方について提言がなされた。新システム構築にあたっては, 利用者調査, DB 充実, ユーザ参加型システム指向, 他関連 DB 連携, 等の検討の必要性とともに, そのための人的資源確保の重要性も指摘された。

## (B) SORD の将来展望(盛山和夫, 小島秀夫, 高橋徹)

まず, 盛山氏からは「学術論文における質的データの提示について」と題して, SORD における質的データの扱いに関する提言があった。具体的には, 量的データと質的データの比較検討を踏まえ, 質的データを如何に提示するか, さらに学術論文中でのその提示方法のあり方についても言及し, 質的 DB の有用性についての話題提供がなされた。これは SORD のマルチメディアデータベース化への重要な提言であり, 従来の学術論文や報告書のハイパーメディア化を示唆するものである。調査資料及びその成果報告書等のマルチメディアデータベース化は SORD における重要な研究課題といえる。

次に, 小島氏からは「SORD のさらなる発展のための2, 3の提言」と題して, SORD の利用方法の観点から, そのあり方について提言された。SORD をさらに利用してもらうためには, まず公開データを増やすことであり, そのためには他分野・他学会との連携が必要であること, またこれにより単なるデータ参照だけでなく, データベース分析等のより高度なデータベース利用も可能になるとの指摘があった。さらに, SORD 独自のサービス内容の充実も指摘された。例えば, ホームページ上での単なる情報提供ではなく, 情報取得に関する相談コーナーや各種レクチャーページの設置などである。これらは SORD の一層の有用性を高めるための重要な施策といえよう。

最後に, 本学の高橋氏より, SORD データの教育利用に関する取り組みについての報告があり, SORD データ利用の重要な観点として, 積極的な検討の必要性が主張された。社会調査実習等の教育利用サンプルデータベースの存在は非常に有益であるとの共通認識のもと, 新たな研究課題として取り組んでいくこととなった。

## 2.4 総括

今回のワークショップは1998年8月に開設された「社会・意識調査データベース(SORD)」

作成プロジェクトのホームページへのアクセス状況を踏まえて、今後の本プロジェクトの取り組み方を探ることを目的に、特に研究・教育用への素データ利用・活用に関する報告を中心に、活発な議論が展開された。その中で、今後の SORD プロジェクトのあり方について貴重な意見が数多く提示され、これからの SORD プロジェクトの運営方針が明確化されたといえる。

### 3. 2000 年度の活動概要

本年度は新たな事務局体制のもとで、ホームページの刷新等新たな試みがなされている。以下、その活動概要について報告する。

#### (1) 新たな体制での再出発

佐藤から新國への事務局体制の移行とともに、高橋及び中澤の両氏が新たに加入したことにより SORD 事務局の若返りと体制強化が実現された。

#### (2) 素データ利用依頼への対応

大学関係者（学生含む）から 8 件と企業関係者から 1 件、各々素データ等の利用申し込みがあり、対応した。その利用目的は、大学関係者においては卒業研究（学士論文、修士論文作成）、教員による研究論文作成、教育利用のためとなっており、また企業関係者においては市場調査のため、となっている。最近の利用申し込みの特徴は、単なる閲覧だけではなく Web からの素データ等のダウンロードを要求するようになってきていることである。

#### (3) リンク依頼への対応

愛媛大学法文学部とインターネット検索エンジン「フレッシュアイ」管理者からリンク依頼があり、対応した。既に 1999 年 7 月に「Yahoo!」の検索エンジンにリンク登録されているが、このような著名な検索エンジンへのリンク登録が続き、SORD プロジェクトの認知度は一層高まるものと思われる。

#### (4) SORD ホームページの刷新とアクセス状況

##### (a) ホームページの刷新

2000 年 7 月に中澤氏が中心となり SORD のホームページを刷新した。新たな情報発信の場の構築と同時に、新たな研究交流の場として、研究者間のコミュニケーションを増幅させるための工夫を行った。具体的には下記のような新たな拡張を試みた：

- \* 交流の広場の充実（掲示板の設定）、
- \* 社会調査や情報処理技術に関するページ
- \* 英語ページの設定
- \* リンク情報の充実

##### (b) SORD ホームページアクセス状況

新たなホームページとして公開した 2000 年 7 月以降のアクセス数は、2001 年 1 月下旬現在で約 6,500 件となっている。また、データベース参照のためにユーザ登録して下さった利用者は延べ 638 名である。登録者は大学や研究機関の教員および研究員、大学院生、学生、公的機関の職員、会社員、中学校の教諭や生徒など多岐にわたっているが、大学院生と学生が 57% と半数を超えている。内訳は以下の通りである：

[所属] 大学および研究所：487 名 (76.33%)、その他（公的機関および会社など）：120 名 (18.81%)、記入無し：31 名 (4.86%)

[職名] 大学および研究所の教員／研究者：118 名 (18.50%)、大学院生および大学生：364 名 (57.05%)、その他（会社員、調査関係の専門職、公的機関の職員など）：82 名

(12.85%), 記入無し:74名(11.60%)

[海外/国内] 国内:616名(96.55%), 海外:22名(3.45%, 大学教員/学生)

#### (5) SORD データベースサーバマシンの導入とデータベースの移行

本年より SORD プロジェクト自前のデータベースサーバマシンを導入することができ、SORD データベースを移行した。データベースの一層の充実が期待される。

#### (6) 調査データの SORD データベースへの登録と公開

日本家族社会学会の「家族と夫婦関係に関する調査」を登録し、公開した。

また、今年度新たに公開した調査概要情報は 109 件である。その結果、現在 726 件の調査概要情報がホームページ上から閲覧可能になっている。

#### (7) 今年度の SORD ワークショップの企画

今までは全国的な規模で日本社会学会会員が実施した社会・意識調査に関する情報(データ)の収録を行ってきた。今後は新たな試みとして北海道で実施された調査に焦点を当て、北海道の調査情報(データ)を網羅的に収録することを考えている。「SORD にアクセスすれば北海道の調査は全て調べられる、そして調査データの利用もできる」ということを目標にしている。ところで、社会調査は社会学分野以外の様々な分野でも沢山実施されている。今後は収録する分野を広げてより充実したものになりたいと考えている。

以上のことから、今年度のワークショップは、本学および道内で社会調査を実施している教員や研究者に参加を呼びかけ、SORD プロジェクトの紹介と本活動への理解、そして協力をお願いする場にしたいと考えている。開催は3月を予定している。

## 4. おわりに

以上、1999年3月末に開催された第8回「社会・意識調査データベース(SORD)」ワークショップの報告とともに、2000年度のSORDプロジェクトの活動概要について報告した。ここで報告した内容は今年度のワークショップでさらに発展したものになると予想される。関係各位の建設的な意見交換を期待したい。

ホームページ公開により、SORDプロジェクトの社会的認知度は一層高まりつつあり、それとともにSORDプロジェクトへの期待感もそれ以上に高まりつつある。また、2000年12月に出版された東大社会科学研究所附属日本社会研究情報センターの佐藤博樹他により編集された「社会調査の公開データ」(佐藤博樹他編、2000:245)において、日本国内におけるデータ・アーカイブの一つとしてSORDが紹介されている。他に、大谷らによる「社会調査へのアプローチ——理論と方法——」にも紹介されている。

以上まとめると、今年度はSORDプロジェクトの新たな歩みの始まりであり、そして新たな課題への挑戦が始まった年でもあると言える。これに添えていくには、SORDプロジェクト事務局の一層の努力はもとより、関係各位の継続的なサポートが必要である。引き続き関係各位のご支援ご指導をお願いしたいものである。

## 参考文献

佐藤博樹, 石田 浩, 池田謙一 [編] (2000) 「社会調査の公開データ」 東京大学出版会

大谷信介, 木下栄二, 後藤範章, 小松 洋, 永野 武編著 (1999) 社会調査へのアプローチ——理論と方法——, ミネルヴァ書房